

水戸葵陵高等学校 医歯薬コース

2012年3月

医歯薬通信 SANS FRONTIERES vol.9

水戸葵陵高等学校ホームページ <http://www.kiryo.ac.jp/>

はじめに

皆さんは日本社会全体に多大な影響を及ぼすと言われる「2020年問題」、「2030年問題」をご存じだろうか。まず「2020年問題」とは団塊の世代（1947～51年頃生まれのベビーブーム世代。1千万人をはるかに超える。日本の中産階層の象徴）がいよいよ後期高齢者（75歳以上の高齢者）となり日本が「多死社会」化していく現象とその影響のことだ。その年間死者数150万人。一方、新生児数は年間75万人と言われる。この数値が続いていくと日本はどうか。また、この現象はいつまで続いていくことになるだろうか。

次に「2030年問題」。団塊ジュニア（先に挙げた団塊の世代の子ども達。バブル崩壊後の就職氷河期に学校を卒業したため就職ができなかった者も多い。格差社会、貧困化の象徴、非婚化も進んだ）が中高年の仲間入りをする。単身世帯（一人暮らしの世帯）が全世帯数の40パーセントを超え、社会の無縁化が更に進むと予想される。

「多死社会」「無縁社会」の地平で皆さんを待ち受けている日本の姿とはどのようなものだろう？

皆さんはまだ若く、将来への希望に満ちあふれてほしい。しかし、こうした10数年後、20数年後の近未来に予想される状況をしっかりと把握したうえで「社会の木鐸」として日本を導いてほしい。

「生命とは、受精によって感染する致死的な病気である。」という良く知られたジョークがある。私たちはごく限られた時間しか生きられない。「いのち」には時間（終わりのタイマー）が生まれながらに内臓されているのだ。私たちは必ず「死」に向かって生きていると言えるだろう。

現代日本社会は私たちの目に触れないように意図的に死体や死因を遠ざけているようにさえ思える。「多死社会」への入り口にいる私達は「死」を通してもう一度「命」・「生きる」ということの意味をしっかりと考えていかねばならない時がきているのだと思う。

Mehr Licht !!

夏期海外・学習合宿



医歯薬コース1年、2年は合同で、学習合宿を実施しました。8月23日～26日まで、行方市のレイクエコーにて3泊4日の日程で行いました。

サイエンスキャンプ

高校生を対象に、大学や公的研究機関、民間企業の研究所が、長期休業期間に本格的な実験や実習を主体とした科学技術体験合宿プログラムであるサマーサイエンスキャンプに本校生が参加しました。放射線医学総合研究所で開催された「意外と面白い放射線医学の世界」に参加した生徒は、目標としている医学部に対する気持ちが一層高まったと話していました。

1回ホームルーム



9月16日に1・2学年の医歯薬コースの生徒99名で東京お台場にある日本科学未来館とパナソニックセンター東京内のRiSuPiaに行きました。日本科学未来館では最先端の科学技術に触れることで、未来の発展に興味を持つと同時に自らがその開発に携わっていく

決意をした生徒もいたようです。RiSuPiaでは理数系の実験器具に触れたりアトラクションを体験したりすることで、普段授業で学んだことを再確認した生徒や、疑問に思っていたことを解決した生徒が多く見られました。

一日医師体験

夏季休業中に水戸市の城南病院において1,2年生の生徒が一日医師体験に参加しました。そこではデイケアの体験や、医師との会話、手術室や霊安室の見学等を経験しました。また昼食は入院患者と同じメニューの食事を頂き、その栄養の管理やバランスを学んだようです。以下は参加生徒の感想です。

「数時間の体験の中で見たこと、聴いたこと、感じたこと様々な人々と触れ合ったことすべてが今の自分にプラスになったのではないかと思います。地域医療を支えているこの病院で幅広い医療の現場を見ることができて、とても有意義な時間を過ごせました。」

筑波大学公開講座

医歯薬コースの1年生から1名、筑波大学公開講座「高原の自然観察—生物どうしのかかわりあい—」に参加しました。この講座は事前のレポート提出により全国から選抜された高校生20名が参加し、長野県にある筑波大学菅平高原実験センターにおいて3泊4日の生物に関する実験・実習をおこないました。参加した生徒は全国の進学校からの生徒と交流し、大学レベルの内容を学習したことから、高校では得られない経験を積み、また一段と成長したようでした。以下はその感想文です。

「内容は最小限の講義、そしてその他は全て、広大な森林地帯を使用した実習でした。敷地内の森は何十年かごとに意図的に手入れを放置し、自然の森を創っていました。生物についての知識をあまり持っておらず、講義でわからない点もありましたが、筑波大学の先生に、分かりやすく教授して頂き、納得をするまで付き合ってくださいました。限られた人だけが体験できる講座に参加でき、とても有意義な経験をしました。」

理学療法(リハビリテーション)見学会

社団法人茨城県理学療法士会の主催で、理学療法(リハビリテーション)見学会が7月～8月に茨城県内の病院・施設で実施され本校からは5名が参加しました。「理学療法士」を理解する為に、実際の現場を見学することは重要なことで、病院によって患者さんの病気やケガが違うので、リハビリテーションの内容は施設ごとにより異なります。生徒達は理学療法士や作業療法士の仕事について現場で実際に見学し、理解を深めたようです。

私は理学療法士の体験をして、患者さんにリハビリを辛いものではなく楽しいものだと認識させるために、リハビリに関わるすべてのスタッフはいつも笑顔で患者さんと接し、その笑顔が患者さん達を励ましているのだなと思い、とても充実したやりがいのある仕事だなと実感しました。そして、自分もこの様な笑顔の絶え以内PTになれるよう頑張りたいと思いました(水戸中央病院に参加)。

放射線技師見学

平成23年8月4日に本校卒業生の保護者のご厚意によって、常陸太田市の医療法人貞心会西山堂病院に放射線技師の仕事を見学に来校2年生1名が行って来ました。診療放射線技師は、病院等では「X線撮影」「超音波検査」、「MR」、「放射性同位元素の検査」や「放射線治療」といった仕事の他、医用放射線利用に関する「安全管理」なども行っています。患者さんに手術の負担をかけないため、健康診断のためなど放射線技師の撮影技術は今後の治療の方針決定に大変重要なものです。以下生徒の感想です。

今まで、病院や大学で設備等の見学をさせてもらったことはありますが、今回は実際に放射線技師の仕事の間近で見ることができ、とても貴重な体験となりました。そして、こうした機会がないと学ぶことができない、患者との接し方、レントゲン・CT・MRI画像の処理方法などを学ぶことができました。今回の貴重な体験を自分の将来に活かしていきたいと思います。

読書会

『話を聞かない医師 思いが言えない患者』 磯部光章 (集英社新書)

病院で受診した際に、自分の思いがうまく伝える事が出来なかったり、医師に話を聞いてもらえず、受けた治療に不満を感じた事は無いだろうか?このコミュニケーションクライシスが現代の医療不信、医師不信の一因であるが、患者と医師の立場の違いから生じていることが多い。この本では内科医である作者が、普段の診療中に思った患者と医師の考え方の違いや関係の変化について、実例を用いて分かりやすく説明している。また、それをふまえ、学生にどのように指導しているか、そして、お互いの要素から考えたよい医療を受けるために必要な、患者-医師間の特殊なコミュニケーションを改善方法についても紹介している。患者にとってよい医療を受け、医師にとってよい医療を提供するために最も重要な事はコミュニケーションである。この本では医師と患者という考えの違う人との間の、コミュニケーションの難しさについて書かれているが、身の回りでも似たような関係が多く見られる。医療従事者を目指すものだけでなく、コミュニケーションで悩んでいる人に読んでもらいたい。

行事予定

- 3月21日終業式
- 3月23日新入生保護者説明会
- 3月26日～30日春期課外